

日 本 国 特 許 庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日            2 0 0 2 年 1 2 月 2 0 日  
Date of Application:

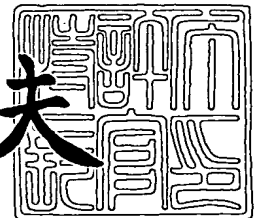
出 願 番 号            特 願 2 0 0 2 - 3 7 0 2 3 8  
Application Number:  
[ST. 10/C]:            [ J P 2 0 0 2 - 3 7 0 2 3 8 ]

出      願      人            日本油脂株式会社  
Applicant(s):            高砂香料工業株式会社

2 0 0 3 年 1 1 月 1 4 日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

今 井 康 夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 NYU-402

【提出日】 平成14年12月20日

【あて先】 特許庁長官 殿

【国際特許分類】 A61K 7/00

【発明の名称】 皮膚化粧料

【請求項の数】 2

【発明者】

    【住所又は居所】 兵庫県尼崎市大庄西町 1 - 1 8 - 1 6 - 1 0 1

    【氏名】 石田 実咲

【発明者】

    【住所又は居所】 神奈川県平塚市西八幡 1 - 4 - 1 1 高砂香料工業株式会社総合研究所内

    【氏名】 川田 泉

【特許出願人】

    【識別番号】 000004341

    【氏名又は名称】 日本油脂株式会社

【特許出願人】

    【識別番号】 000169466

    【氏名又は名称】 高砂香料工業株式会社

【代理人】

    【識別番号】 100078732

    【弁理士】

    【氏名又は名称】 大谷 保

【手数料の表示】

    【予納台帳番号】 003171

    【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

    【物件名】 明細書 1

【物件名】

要約書 1

【プルーフの要否】

要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 皮膚化粧料

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 (A) クルミ科ペカン属に属する植物の種子抽出物及び種子殻抽出物から選ばれる少なくとも一種を固形分として 0.00005～2 重量%、及び (B) 油溶性抗酸化剤を 0.001～10 重量%含有することを特徴とする皮膚化粧料。

【請求項 2】 油溶性抗酸化剤が、ビタミン E、ビタミン A、これらの誘導体、及びビタミン C 誘導体から選ばれる少なくとも一種である請求項 1 記載の皮膚化粧料。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は化粧水、乳液、クリーム、パック等の皮膚用の化粧料に関し、詳しくは使用時の感触が軽く使用後もべたつかず、保湿効果の持続性に優れ、肌荒れ防止効果、しわ防止・改善効果に優れるとともに肌にはりを与え、かつ経時安定性に優れる皮膚化粧料に関する。

【0002】

【従来の技術】

通常、人の皮膚表面（肌）は皮脂膜に覆われており水分の蒸散が適度に抑制されているため、肌の水分が不足すると肌荒れ等を生じやすく、しわの原因にもなりやすい。このため、皮膚の水分を適切な範囲に保つことは皮膚の健康の面から見て非常に大切なことである。しかし、皮脂膜は洗顔や入浴時の洗浄により取り除かれてしまうことがあるので、一時的に肌の水分が失われやすくなる。そのため、洗顔後、あるいは入浴後には肌の水分を補い、保持するために化粧水、乳液、クリーム、美容液等の保湿化粧料が使用されている。一般に保湿化粧料には保湿剤としてグリセリン、1,3-ブチレングリコール、ソルビトール等の多価アルコール類、ピロリドンカルボン酸塩等が配合されているが、これらは高湿度下における水分保持力には優れているものの低湿度下における水分保持力に難があ

り、保湿効果の持続性が十分ではない。

【0 0 0 3】

そこで、肌の保湿効果や柔軟性を保つため、エステル油や炭化水素油等の種々の油性成分が用いられており、特に不飽和脂肪酸やその誘導体を含む油性成分が優れた生理学上、皮膚化学上の作用を有することが知られており様々な化粧品に配合されている（特許文献 1、2）。しかしながら、これら油性成分を使用した化粧品は、経時的に酸化劣化する傾向を有することから、従来から種々の油溶性抗酸化剤が皮膚化粧品に利用されてきた（特許文献 3～5）。また、最近では肌の老化防止対策として皮脂の抗酸化が注目されており、肌の老化とは加齢にともない、しわ、血行不良、色素沈着等により肌のくすみ等が生じてくる現象であり、紫外線曝露により発生する活性酸素が皮脂の酸化を誘導することが肌老化の一因であるとの報告がある。そこで、油溶性抗酸化剤を製品の安定化だけでなく、塗布した後の皮脂の酸化防止を目的として配合した化粧品も開発されている（特許文献 6）。

しかし、これらの油溶性抗酸化剤を使用した化粧品は経時的な安定性が十分ではなく、また、肌荒れ防止効果、しわ防止・改善効果等においても十分な効果を有していないのが現状であり、また、肌にはりを与える効果等を併せ持つものでもなかった。一方、肌の老化防止を目的として抗酸化能のある種々の植物抽出エキスを配合した化粧品が開発されているが、これらについても上記効果は十分でなく、しかも経時的に酸化劣化して変色を生じたり、沈殿する傾向があるとともに、肌へはりを与える効果、肌のくすみを改善する効果においても十分ではなかった。

【0 0 0 4】

【特許文献 1】

特開平 5 - 2 8 6 8 4 6 号公報

【特許文献 2】

特開平 8 - 1 0 9 1 2 8 号公報

【特許文献 3】

特開昭 5 8 - 4 1 8 1 3 号公報

## 【特許文献 4】

特開平 10-212477 号公報

## 【特許文献 5】

特開平 10-212478 号公報

## 【特許文献 6】

特開平 10-182405 号公報

## 【特許文献 7】

特開 2000-72686 号公報

## 【0005】

## 【発明が解決しようとする課題】

本発明は、このような状況下で、上記課題を解決し、肌の保湿効果が持続し、肌荒れ防止効果やしわ防止・改善効果に優れるとともに、肌にはりを与える効果や肌のくすみ改善効果に優れ、かつ経時安定性にも優れた皮膚化粧料を提供することを目的とするものである。

## 【0006】

## 【課題を解決するための手段】

本発明者らは、上記課題を解決すべく鋭意研究を重ねた結果、特定の植物種子抽出物及び／又は種子殻抽出物と油溶性抗酸化剤とを特定の割合で含む皮膚化粧料により本発明の上記目的を達成しうることを見出した。

すなわち本発明は、(A) クルミ科ペカン属に属する植物の種子抽出物及び種子殻抽出物から選ばれる少なくとも一種を固形分として 0.00005～2 重量%、及び (B) 油溶性抗酸化剤を 0.001～10 重量%含有することを特徴とする皮膚化粧料を提供するものである。

## 【0007】

## 【発明の実施の形態】

本発明の皮膚化粧料には、(A) 成分として、クルミ科ペカン属に属する植物の種子抽出物及び種子殻抽出物から選ばれる少なくとも一種が含有される。この抽出物の製造方法については特に制限はなく、例えばクルミ科 (Juglandaceae) ペカン属 (Carya) に属する植物、具体的にはヒッコリー (C. tomentosa (Poi) Nut

t) やペカン (*Carya illinoensis* (wang) K. Koch) 等の種子及び／又は種子殻をそのままもしくは乾燥後に、炭化水素化合物類、エステル類、ケトン類、エーテル類、ハロゲン化炭化水素化合物類、アルコール類及び水から選ばれる一種または二種以上の溶剤とともに加熱還流あるいは浸漬することにより目的の抽出物を得ることができる。好ましい抽出物は、クルミ科ペカン属ペカンの種子殻を用い、水または低級アルコールの一種または二種以上で抽出したものであり、更に好ましくは水で抽出したものである。

#### 【0008】

抽出方法の具体例としては以下に示す方法がある（特許文献7参照）。

まず、被処理種子及び／又は種子殻をそのままあるいは乾燥処理後破碎し、その重量の5～100倍量程度の抽出溶剤により抽出処理する。抽出温度は、使用する抽出溶剤の種類に応じて適宜選定される。例えば抽出溶剤が水である場合には、抽出温度は通常20～120℃程度であり、抽出溶剤が低級アルコールの場合、通常20～50℃程度、好ましくは室温である。また、抽出時間は、抽出溶剤が水である場合には5～60分間程度でよいが、低級アルコールの場合24～96時間程度が適当である。

抽出処理後、ろ過などの手段により固液分離して抽出液を取り出し、常法に従って抽出溶剤を留去させ、必要に応じ乾燥処理することにより目的の抽出物が得られる。

#### 【0009】

本発明の（A）成分である前記抽出物の含有量は、固形分として化粧料全量につき0.00005～2重量%の範囲で選定される。この量が0.00005重量%未満では肌荒れ防止効果、しわ防止・改善効果、肌にはりを与える効果が弱くなる。一方2重量%を超えると経時安定性が悪くなるだけでなくコスト的に不利である。該（A）成分の好ましい含有量は、固形分として0.0001～1.5重量%であり、さらに0.0005～1重量%の範囲が好ましい。

なお、本発明においては（A）成分の抽出物は、抽出液そのもの、又はその濃縮物、乾固物として配合される。したがって、該抽出物が抽出溶剤を含む場合には、ガスクロマトグラフィーや高速液体クロマトグラフィーなどにより溶剤量を

定量し、固形分量を計算値として求める。

#### 【0010】

本発明の皮膚化粧料には (B) 成分として油溶性抗酸化剤が含有される。油溶性抗酸化剤としては特に制限はないが、例えば  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、 $\delta$  -トコフェロール等のビタミン E、酢酸 d l - $\alpha$  -トコフェロール等のビタミン E 誘導体、レチノール、3-デヒドロレチノール等のビタミン A、酢酸レチノール、パルミチン酸レチノール、レチナール、レチノイン酸またはその塩、レチノイン酸エチル、レチノイン酸ブチル等のエステル類、レチニルリン酸またはその塩等のビタミン A 誘導体、ビタミン A を多く含有する魚類から抽出した肝油、アスコルビン酸パルミテート等のビタミン C 誘導体、ブチルヒドロキシアニソール (BHA)、ジブチルヒドロキシトルエン (BHT)、オイゲノール、イソオイゲノール、没食子酸プロピル、ソルビン酸、また、セサミンやそれを多く含有するゴマ油、フラボノイド類が用いられる。この中でも、ビタミン E またはその誘導体、ビタミン A またはその誘導体、ビタミン C 誘導体が好ましく用いられる。

#### 【0011】

本発明においては、(B) 成分として、油溶性抗酸化剤を一種用いてもよく、二種以上組み合わせて用いてもよい。また、この含有量は組成物全量中に 0.001 ~ 10 重量% の範囲で選定される。この量が 0.001 重量% 未満では肌荒れ防止効果、しわ防止・改善効果、くすみ改善効果が十分でなく、一方 10 重量% を超えるとのびが悪くなったりべたつきを生じたりする等使用時及び使用後の感触が悪くなるとともに経時安定性に問題を生じることがある。該 (B) 成分の好ましい含有量は 0.005 ~ 8 重量% であり、さらに 0.01 ~ 5 重量% の範囲が好ましい。

本発明においては、肌荒れ防止効果、しわ改善効果、肌にはりを与える効果、くすみ改善効果などの点から、上記 (A) 成分と (B) 成分の配合比 (A/B) が 1/20 ~ 5/1 の範囲内にあることが好ましく、特に 1/10 ~ 3/1 の範囲内にあることが好ましい。

#### 【0012】

本発明の皮膚化粧料には、所望により、各種添加剤、例えば低級アルコール類



、多価アルコール類、炭化水素系油、天然油脂類、エステル油、ロウ類、シリコーン誘導体、油性基剤、各種界面活性剤、水溶性高分子化合物、有機又は無機塩類、pH調整剤、殺菌剤、キレート剤、紫外線吸収剤、他の動植物由来の天然エキス、色素、香料などを配合することができる。

前記低級アルコール類としては、例えばエタノール、イソプロピルアルコールなどが、多価アルコール類としては、例えばプロピレングリコール、ジプロピレングリコール、グリセリン、ジグリセリン、1,3-ブチレングリコール、ポリエチレングリコールなどが挙げられる。

#### 【0013】

炭化水素系油としては、例えば流動パラフィン、流動イソパラフィン、スクワラン、ワセリン、固形パラフィンなどが、天然油脂類としては、例えば牛脂、豚脂、魚油などが、そしてエステル油としては、例えばトリ2-エチルヘキサン酸グリセリル等の合成トリグリセライド、ミリスチン酸イソプロピル、パルミチン酸イソプロピル、パルミチン酸セチル、オレイン酸エチル、オレイン酸オレイル、ミリスチン酸オクチルドデシルなどが挙げられる。

ロウ類としては、例えばミツロウ、カルナバロウなどが、シリコーン誘導体としては、例えば直鎖及び環状のジメチルポリシロキサン、ポリエーテル変性ジメチルポリシロキサン、アミノ変性ジメチルポリシロキサンなどが、油性基剤としては、例えばセラミド、コレステロール、蛋白誘導体、ラノリン、ラノリン誘導体、レシチンなどが挙げられる。

#### 【0014】

各種界面活性剤としては、例えば石鹸、アシルメチルタウリン塩、アミドエーテル硫酸エステル塩等の陰イオン性界面活性剤；アミドアミノ酸塩、アミドプロピルジメチルアミノ酢酸ベタイン等の両性界面活性剤；ポリオキシエチレンアルキルエーテル、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル、ソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレンソルビタン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレン硬化ひまし油、ポリグリセリン脂肪酸エステル、ポリオキシエチレングリセリン脂肪酸エステル、グリセリンモノ脂肪酸エステル、アルキルポリグルコシド、アルカノールアミド等の非イオン性界面活性剤；塩化アルキルトリメチルアンモニウム

等の陽イオン性界面活性剤；アルキルジメチルアミノキシド等の半極性界面活性剤などが挙げられる。

#### 【0015】

水溶性高分子化合物としては、例えばアルギン酸、カルボキシビニルポリマー、カルボキシメチルセルロース、ヒドロキシプロピルメチルセルロース、ヒドロキシエチルセルロース、キサントガム、ヒアルロン酸などが、無機又は有機塩類としては、例えばピロリドンカルボン酸塩、クエン酸塩、リンゴ酸塩、食塩などが、pH調整剤としては酸及びアルカリが挙げられる。

本発明の皮膚化粧品は、化粧水、乳液、クリーム、パック等の皮膚用の化粧品として好適に用いられる。

#### 【0016】

##### 【実施例】

次に、本発明を実施例により更に具体的に説明するが、本発明はこれらの例によって何ら限定されるものではない。

##### 製造例1 ペカン種子殻抽出物A-1の製造

クルミ科ペカン属ペカンの種子（ペカンナッツ）を種子殻付きのまま粉碎し、その粉碎物100gに50重量%エタノール水溶液500mLを加えて室温で48時間静置して抽出液を得た。この抽出液より溶媒を減圧留去し、目的のペカン種子殻抽出物A-1（褐色紛体7.2g）を得た。

##### 製造例2 ペカン種子殻抽出物A-2の製造

製造例1と同様にして得たペカン種子殻粉碎物100gに蒸留水500mLを加えて110℃で10分間加熱還流して抽出液を得た。この抽出液より溶媒を減圧留去し、目的のペカン種子殻抽出物A-2（淡褐色紛体6.5g）を得た。

##### 製造比較例1 クルミ種子殻抽出物A-3の製造

クルミ科クルミ（Walnut）の種子殻粉碎物100gに蒸留水500mLを加えて110℃で10分間加熱還流して抽出液を得た。この抽出液より溶媒を減圧留去し、クルミ種子殻抽出物A-3（褐色粉体2.4g）を得た。

#### 【0017】

実施例1～3及び比較例1～4

第5表に示す組成を有する透明または半透明化粧水である皮膚化粧料を調製し、下記の方法によりその性能を評価した。結果を第5表に示す（第5表中、添加量は重量％で表す。以下同じ）。尚、添加成分として下記第1表に示す4成分を共通成分として使用した。

【0018】

【表1】

第1表

	成 分 名	添加量 (重量%)
1	クエン酸3ナトリウム・2水和物	0.3
2	エタノール	3
3	メチルパラベン	0.1
4	フェノキシエタノール	0.2
	計	3.6

【0019】

(1) 使用時ののび

20名の女性（22才～37才）をパネラーとし、洗顔した後に皮膚化粧料を使用した時の感触について下記のように判定し、20名の平均値を求めて、平均値1.5点以上を使用時の感触の軽い化粧料であると評価した。

2点：使用時ののび良く、ひっかからずに軽い感触であると感じた場合。

1点：使用時ののびがやや悪く、ややひっかかると感じた場合。

0点：使用時ののびが悪く、ひっかかり重い感触であると感じた場合。

(2) 使用後のべたつき

20名の女性（22才～37才）をパネラーとし、洗顔した後に皮膚化粧料を使用して10分後の肌の感触について下記のように判定し、20名の平均値を求めて、平均値1.5点以上を使用後にべたつきがない化粧料であると評価した。

2点：肌がべたつかないと感じた場合。

1点：肌がややべたつくと感じた場合。

0点：肌がべたつくと感じた場合。

## 【 0 0 2 0 】

## (3) 肌荒れ防止効果

肌荒れを生じ易い女性 1 0 名 ( 2 3 才 ~ 3 5 才 ) をパネラーとし、皮膚化粧品を一日 2 回ずつ連続 2 週間使用した時の肌の状態について下記のように判定し、1 0 名の平均値を求めて、平均値 1 . 5 点以上を肌荒れ改善効果のある化粧品であると評価した。

2 点：肌荒れが全く生じなかった場合。

1 点：やや肌荒れが生じたと感じた場合。

0 点：肌荒れ防止効果がないと感じた場合。

## (4) しわ改善効果

1 0 名の女性 ( 3 1 才 ~ 4 5 才 ) をパネラーとし、皮膚化粧品を目尻に一日 2 回ずつ連続 2 週間使用した時の肌の状態について官能で下記のように判定し、1 0 名の平均値を求めて、平均値 1 . 5 点以上をしわ改善効果に優れた化粧品であると評価した。

2 点：しわが明らかに目立たなくなったと感じた場合。

1 点：しわがやや目立たなくなったと感じた場合。

0 点：しわ改善効果が全く無いと感じた場合。

## 【 0 0 2 1 】

## (5) 肌にはりを与える効果

2 0 名の女性 ( 2 2 才 ~ 3 7 才 ) をパネラーとし、皮膚化粧品を一日 2 回ずつ連続 2 週間使用した時の肌の状態について官能で下記のように判定し、2 0 名の平均値を求めて、平均値 1 . 5 点以上を肌にはりを与える効果のある化粧品であると評価した。

2 点：明らかに肌にはりがでたと感じた場合。

1 点：やや肌にはりがでたと感じた場合。

0 点：肌にはりがないと感じた場合。

## (6) 肌のくすみ改善効果

2 0 名の女性 ( 2 2 才 ~ 3 7 才 ) をパネラーとし、皮膚化粧品を一日 2 回ずつ連続 2 週間使用した時の肌の状態について官能で下記のように判定し、2 0 名の

平均値を求めて、平均点 1.5 点以上を肌のくすみの改善効果に優れた化粧料であると評価した。

2 点：くすみが明らかに目立たなくなったと感じた場合。

1 点：くすみがやや目立たなくなったと感じた場合。

0 点：くすみ改善効果が全く無いと感じた場合。

#### 【0022】

##### (7) 経時安定性

化粧料を透明ガラス容器に密封して 0℃、25℃、40℃で 3 ヶ月間保存し、その外観を観察して、下に示す 3 段階で評価した。

○：安定性良好（いずれの温度でも外観の変化がない。）

△：安定性やや不良（いずれかの温度において若干おり、沈殿を生じるまたは若干変色を生じる。）

×：安定性不良（いずれかの温度においており、沈殿を生じるまたは分離する。もしくは変色が著しい。）

実施例 1～3 より、本発明の成分を用いた化粧水はいずれも使用時の感触が軽く使用後もべたつかず、肌荒れ防止効果、しわ改善効果に優れるとともに肌にはりを与え、くすみ改善効果に優れ、経時安定性にも優れていた。一方、比較例 1～4 では十分な性能が得られていない。つまり、比較例 1 では a 成分が配合されていないことから、肌荒れ防止効果、しわ改善効果、肌にはりを与える効果、くすみ改善効果が弱くなっており、比較例 2 では (B) 成分が配合されていないことから肌荒れ防止効果、しわ改善効果、くすみ改善効果が弱くなっている。また、比較例 3、比較例 4 では (A) 成分に変えて緑茶カテキンやクルミ種子殻抽出物が配合されていることから、安定性が悪くなったり、しわ改善効果、肌にはりを与える効果、くすみ改善効果が弱くなっている。

#### 【0023】

##### 実施例 4～6

第 6 表に示す水中油型乳液である皮膚化粧料を調製し、実施例 1～3 と同様の方法により評価を行なった。但し、添加成分として下記第 2 表に示す 11 成分を共通成分として使用した。結果を第 6 表に示す（第 6 表中、添加量は重量％で表

す。以下同じ)。

【0024】

【表2】

第2表

	成 分 名	添加量 (重量%)
1	キサンタンガム(大日本製薬(株)製「エコーガムT」)	0.1
2	カルボキシビニルポリマー(BF-GoodRich社製「カルボポール940」)	0.12
3	L-アルギニン	0.1
4	エタノール	5
5	精製ひまわり油	5
6	スクワラン	3
7	ミリスチン酸オクチルドデシル	2
8	ポリオキシエチレンステアリルエーテル (20E.O.)	0.7
9	メチルパラベン	0.1
10	ブチルパラベン	0.05
11	フェノキシエタノール	0.2
	計	16.37

【0025】

実施例4～6より、本発明の乳液はいずれも使用時の感触が軽く使用後もべたつかず、肌荒れ防止効果、しわ改善効果に優れるとともに肌にはりを与え、くすみ改善効果に優れ、経時安定性にも優れていた。

実施例7～8

第6表に示す水中油型乳化クリームである皮膚化粧料を調製し、(7)経時安定性について下記の方法により評価を行った以外は、実施例1～3と同様の方法によりその性能を評価した。但し、添加成分として下記第3表に示す8成分を共通成分として使用した。結果を第6表に示す。

【0026】

【表 3】

第3表

	成 分 名	添加量 (重量%)
1	精製オリーブ油	8
2	スクワラン	3
3	ミリスチン酸オクチルドデシル	2
4	ジメチルポリシロキサン (100CS)	1
5	精製ミツロウ	3
6	メチルパラベン	0.2
7	プロピルパラベン	0.1
8	ブチルパラベン	0.1
計		17.4

## 【0027】

## (7) 経時安定性

化粧料を透明ガラス容器に密封して $-5^{\circ}\text{C}$ 、 $25^{\circ}\text{C}$ 、 $45^{\circ}\text{C}$ で1ヶ月間保存したときの状態を調査し、下に示す3段階で評価した。

○：安定性良好（外観の変化がなくブツ等も生じない。）

△：安定性やや不良（僅かに沈殿を生じるか僅かに分離が見られる。または僅かにブツ、ダマを生じている。）

×：安定性不良（明らかに沈殿を生じるか分離する。またはブツやダマを生じる。）

実施例7～8より、本発明のクリームはいずれも使用時の感触が軽く使用後もべたつかず、肌荒れ防止効果、しわ改善効果に優れるとともに肌にはりを与え、くすみ改善効果に優れ、経時安定性にも優れていた。

## 【0028】

## 実施例9～10

第6表に示す油中水型乳化クリームである皮膚化粧料を調製し、実施例7～8と同様の方法により評価を行った。但し、添加成分として下記第4表に示す9成分を共通成分として使用した。結果を第6表に示す。

【0029】

【表 4】

第4表

	成 分 名	添加量 (重量%)
1	精製ホホバ油	3
2	精製ひまわり油	6
3	ジメチルポリシロキサン (100CS)	1
4	スクワラン	4
5	ミリスチン酸オクチルドデシル	5
6	メチルパラベン	0.2
7	プロピルパラベン	0.1
8	ブチルパラベン	0.1
9	硫酸マグネシウム (7水和物)	0.5
計		19.9

【0030】

実施例 9～10 より、本発明のクリームはいずれも使用時の感触が軽く使用後もべたつかず、肌荒れ防止効果、しわ改善効果に優れるとともに肌にはりを与え、くすみ改善効果に優れ、経時安定性にも優れていた。

【0031】



【表 5】

第 5 表

		実施例			比較例			
		1	2	3	1	2	3	4
皮膚化粧料の組成	(A)	ペカン種子殻抽出物A-1	0.1	—	—	—	—	—
		ペカン種子殻抽出物A-2	—	0.2	0.05	—	0.2	—
	(B)	パルミチン酸レチノール <sup>(注1)</sup>	0.1	—	—	—	—	—
		d- $\delta$ -トコフェロール <sup>(注2)</sup>	—	—	0.05	—	—	—
		酢酸d1- $\alpha$ -トコフェロール <sup>(注3)</sup>	—	0.3	—	0.3	—	0.3
	その他	緑茶カテキン <sup>(注4)</sup>	—	—	—	—	—	0.2
		クルミ種子殻抽出物A-3	—	—	—	—	—	0.2
		グリセリン	—	5	2	5	5	5
		ジプロピレングリコール	—	—	3	—	—	—
		ポリエチレングリコール 1540	—	—	2	—	—	—
		モノオレイン酸ポリオキシエチレンソルビタン (20E.O.)	0.5	1	0.3	1	1	1
		ヒドロキシカルボン酸ナトリウム (50%水溶液)	—	—	0.3	—	—	—
		クエン酸・1水和物	0.1	0.1	0.03	0.1	0.1	0.1
		オレイルアルコール	—	—	0.05	—	—	—
		香料	—	—	0.05	—	—	—
		共通添加成分	3.6			3.6		
		精製水	残部			残部		
性能		使用時の感触	1.9	1.9	1.8	1.8	1.8	1.9
		使用後のべたつき	2.0	1.8	1.8	1.6	1.7	1.8
		肌荒れ防止効果	1.8	1.8	1.8	1.1	0.8	1.0
		しわ改善効果	1.8	1.7	1.7	1.0	1.2	1.1
		肌にはりを与える効果	1.9	1.8	1.8	1.2	1.5	1.2
		くすみ改善効果	1.7	1.8	1.8	1.3	1.4	1.2
		経時安定性	○	○	○	○	○	×

(注1) パルミチン酸レチノール (日本ロシュ (株)、ビタミンAパルミテート : 1000000IU/g(0.55g/g))

(注2) d- $\delta$ -トコフェロール (エーザイ (株))

(注3) 酢酸d1- $\alpha$ -トコフェロール (日本ロシュ (株))

(注4) 緑茶カテキン (太陽化学 (株)、サンフェノン 100)

【0032】

【表 6】

第 6 表

			実 施 例						
			4	5	6	7	8	9	10
皮膚化粧料の組成	(A)	ヘカン種子殻抽出物A-1	0.1	—		0.2	—	0.5	—
		ヘカン種子殻抽出物A-2	—	0.3	0.03	—	0.5	—	0.3
	(B)	パルミチン酸レチノール (注1)	0.2	—	0.1	—	—	1	—
		d- $\delta$ -トコフェロール (注2)	—	—	0.1	1	—	—	0.3
		酢酸d1- $\alpha$ -トコフェロール (注3)	—	0.5	—	—	0.1	0.5	—
		6-パルミトイル-L-アスコルビン酸 (注4)	—	—	—	—	0.1	2	—
	その他の	グリセリン	2	2	2	2	2	2	3
		シグマロビレングリコール	2	3	3	3	3	—	—
		ホリエチレングリコール 1540	2	—	—	—	—	—	—
		モノステアリン酸ホリエチレングリコール (1540)	0.5	0.5	0.5	—	—	—	—
		モノステアリン酸ホリエチレングリコール (4000)	—	—	—	1	1	—	—
		モノステアリン酸ポリオキシエチレンソルビタン (20E.O.)	—	—	—	1	1	—	—
		モノオレイン酸グリセリン	—	—	—	—	—	1.5	1.5
		モノオレイン酸シグリセリン	—	—	—	—	—	0.2	0.2
		モノステアリン酸グリセリン	1	1	1	2	2	—	—
		セタノール	2	—	—	3	—	—	3
		ヘニルアルコール	—	1	1	—	3	2	—
		デカメチルシクロヘンタシロキサソ	—	—	—	3	—	—	—
		香料	—	—	0.05	—	—	—	—
		共通添加成分	16.37			17.4		19.9	
	精製水	残 部			残部		残部		
性能	使用時の感触		1.9	1.8	1.8	1.8	1.8	1.7	1.7
	使用後のべたつき		1.8	1.8	1.9	1.7	1.8	1.7	1.6
	肌荒れ防止効果		1.8	1.9	1.8	1.9	1.9	1.9	2.0
	しわ改善効果		1.9	1.7	1.9	1.8	1.8	2.0	1.9
	肌にはりを与える効果		1.8	1.9	1.8	1.9	1.9	1.9	1.8
	くすみ改善効果		1.8	1.9	1.8	1.9	1.8	1.8	1.9
	経時安定性		○	○	○	○	○	○	○

(注1) パルミチン酸レチノール (日本ロシュ (株)、ビタミンAパルミテート: 1000000IU/g(0.55g/g))

(注2) d- $\delta$ -トコフェロール (エーザイ (株))

(注3) 酢酸d1- $\alpha$ -トコフェロール (日本ロシュ (株))

(注4) Ascorbyl Palmitate (日本ロシュ (株))

**【 0 0 3 3 】****【発明の効果】**

以上詳細に説明したように、本発明により、使用時の感触が軽く使用後もべたつかず、肌荒れ防止効果、しわ改善効果に優れるとともに肌にはりを与え、くすみ改善効果に優れ、かつ経時安定性にも優れた皮膚化粧料が得られる。

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 肌の保湿効果が持続し、肌荒れ防止効果やしわ防止・改善効果に優れるとともに、肌にはりを与える効果や肌のくすみ改善効果に優れ、かつ経時安定性にも優れた皮膚化粧料を提供する。

【解決手段】 (A) クルミ科ペカン属に属する植物の種子抽出物及び種子殻抽出物から選ばれる少なくとも一種を固形分として 0. 0 0 0 0 5 ~ 2 重量%、及び (B) 油溶性抗酸化剤を 0. 0 0 1 ~ 1 0 重量%含有することを特徴とする皮膚化粧料である。

【選択図】 なし

特願 2 0 0 2 - 3 7 0 2 3 8

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[ 0 0 0 0 0 4 3 4 1 ]

1. 変更年月日

1 9 9 4 年 1 1 月 9 日

[変更理由]

住所変更

住 所

東京都渋谷区恵比寿四丁目 2 0 番 3 号

氏 名

日本油脂株式会社

特願 2 0 0 2 - 3 7 0 2 3 8

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[ 0 0 0 1 6 9 4 6 6 ]

1. 変更年月日

1 9 9 8 年 1 1 月 2 6 日

[変更理由]

住所変更

住 所

東京都大田区蒲田 5 丁目 3 7 番 1 号 ニッセイアロマスクエア  
1 7 ・ 1 8 階

氏 名

高砂香料工業株式会社

2. 変更年月日

1 9 9 9 年 3 月 4 日

[変更理由]

住所変更

住 所

東京都大田区蒲田五丁目 3 7 番 1 号

氏 名

高砂香料工業株式会社